

19981020 書評

田中洋（法政大学経営学部）

「詩とは何か」 嶋岡 晨、新潮選書、1998 年 9 月 30 日刊。333 頁。

現代詩はなぜ受け入れられないのか？

言語で書かれた芸術のなかで今日、現代詩ほど一般に受け入れられない形式はない。小説や俳句、短歌などは広く市民に受け入れられているにもかかわらず。宮沢賢治ブームなどはむしろ現代詩への無理解を象徴している出来事である。

この本は新体詩から 90 年代の詩まで長い現代詩の歴史を、わずか 300 頁余りで語ろうとしている。そして多くの詩が全文引用ではなく、断片的な引用で終わっているのだ。この本の「無謀さ」については著者が誰よりも承知しているだろう。

しかし、嶋岡氏は大衆から無視されている詩の現状についての的確にその理由を述べている。戦後の現代詩は常に「詩的」なものから遁走してきたのだ。戦後詩はいつからか様式性から完全に決別した。人々が詩と考えるものを否定するところから始めるという現代詩の逆説的な「伝統」を我々は育ててきた。

今回このコンパクトな詩史を通読して私はその理由を自分なりに納得することができた。ヨーロッパの詩に触発されて始まった新体詩の歴史が、高村光太郎らの戦争詩に収束した忌まわしい過去を現代詩は背負っている。戦後、荒地派が出発した過去を否定する「伝統」を現代詩は引き継がなくてはならなかった。今日詩を読み・書くということはいずれにせよこのような負の遺産を背負うことを意味している。

谷川雁、吉岡実、渋谷孝輔、鈴木志郎康…今日これらの名前を理解する若い人たちが何人いるだろうか。このような現代詩の宿命を理解するためにも、本書は貴重な試みでありつづけるだろう。

(了)